

## 神の建造のための祭司職の回復

(土曜日——午前の第二の部)

メッセージ 5

### 祭司の体系の二つの位

聖書: I ペテロ 2:5, 9. 啓 5:10. 出 29:1, 4. 創 14:18-20. ヘブル 13:15, 2:12

- I. 聖書の中で、祭司の基本的な意義は、祭司が神を人に供給することです:
- A. 聖書の中で、最初に述べられている祭司の記述は、祭司の原則を確立しています。
  - B. 聖書の中で、最初に「祭司」という言葉が用いられているのは、メルキゼデクについてであり、彼は王であり、王なる祭司でした——創 14:18-20。
  - C. 聖書の中で、祭司職についての基本的な物語は、人が神から来て、神のものを神の民に供給するという物語です:
    - 1. メルキゼデクは神から来て、神のものをアブラハムに供給しました。
    - 2. パンとぶどう酒が表徴するのは、わたしたちの享受としての神と、わたしたちに供給されて、わたしたちを養い、元気づけ、支え、慰め、増強する神です。
  - D. 今日、わたしたちは真の祭司であろうとするなら、祭司がただ神に仕える者であるだけでなく、神を人の中へと供給する者でもあることを認識する必要があります。
  - E. わたしたちが祭司として、どのように神に仕えるかを知るだけで、どのように神を人に供給するかを知らないなら、祭司職に関するわたしたちの間の状況は実に貧弱です。
- II. 祭司の体系の二つの位は、聖なる祭司の体系と王なる祭司の体系です——啓 5:10. I ペテロ 2:5, 9:
- A. 聖なる祭司の体系はアロンの位によって予表されており、アロンの位は聖なる位です——出 29:1, 4. I ペテロ 2:5. ヘブル 2:17:
    - 1. 聖となることは、この世的な事物から分離されて、神へと帰されることです——I ペテロ 1:16:
      - a. 聖なる位は、俗な事物から分離されて、神聖な事物へと帰され、また主の用途へと帰される位です。
      - b. 聖なる祭司は、分離されて、神の民を代表して神へと行く人です——2:5。
    - 2. 祭司の体系の第一の位は、アロンの祭司職の面、すなわち聖なる祭司

## 5. 祭司の体系の二つの位

の体系であって、わたしたちの罪のために神へと犠牲（いけにえ）をささげます。こういうわけで、アロンの祭司職は、おもに罪のためのささげ物と関係があります——ヘブル 10:12：

- a. アロンの祭司職は、罪の問題を解決します。キリストが罪をきよめることは、アロンの働きによって予表されます——1:3, 7:27, 9:12, 28。
  - b. キリストは、罪のために一度いけにえとして、神へとご自身をささげることによって、罪を取り除きました——26 節, 10:10-12。
  - c. アロンの祭司職は、神の当初の意図に含まれておらず、罪の問題のゆえに後から加えられたものでした——1:3, ヨハネ 1:29, ローマ 8:3。
- B. 王なる祭司の体系は、メルキゼデクの位によって予表されており、メルキゼデクの位は王なる尊貴な位です——I ペテロ 2:9, 創 14:18, ヘブル 5:10：
1. 祭司の体系の第二の位は、メルキゼデクによって予表される祭司職の面、すなわち王なる祭司の体系であり、それは手順を経た神をわたしたちの中へと供給し、わたしたちの享受とし、わたしたちの供給とするためです——10 節, 7:1-2。
  2. キリストが、高き所の威光ある方の右に座すことは、メルキゼデクの位にしたがっています——詩 110:1, 4, ヘブル 1:3, 8:1。
  3. キリストは王なる大祭司として、わたしたちが必要とするものは何であれ、わたしたちに供給し、また手順を経て究極的に完成された三一の神を、わたしたちの命の供給としてわたしたちの中へと分与し、神の永遠の定められた御旨を完成します。
  4. 今日、わたしたちの経験において、王なる祭司たちは神から来て、神の民を顧みる者です。それはまさにメルキゼデクが神から来てアブラハムと出会い、彼にパンとぶどう酒を供給したようにです——創 14:18-19。
  5. わたしたちが実際的な召会生活において奉仕するにつれて、真の祭司の体系が現れるのは、わたしたちが神を他の人へと供給して、最終的に彼らが神の表現となるときです——I ペテロ 4:10, II コリント 3:18。
- C. アロンの祭司職は罪の問題を解決し、王なる祭司職は神の永遠の定められた御旨を完成します。アロンの祭司職は罪を取り除き、王なる祭司職は神をわたしたちの恵みとしてもたらしました——ヘブル 1:3, 4:16。

## 5. 祭司の体系の二つの位

D. 一方で、今日の主の回復において、わたしたちは聖なる祭司であり、神の民を代表して神へと行き、彼らの必要を神へともたします。もう一方で、わたしたちは王なる祭司であり、神を代行して神から民へと来て、神を彼らに供給します—— I ペテロ 2:5, 9 :

1. 聖なる祭司は、民のために神へと犠牲をささげ、王なる祭司は、神のものを民へと告げ知らせます。
2. わたしたちは聖なる祭司と王なる祭司であり、二つの方向を行き来しています。

### III. 聖なる祭司の体系は、霊のいけにえ（犠牲）を神へとささげます—— I ペテロ 2:5 :

- A. 神のエコノミーにしたがって、聖なる祭司がささげる霊のいけにえは、次のものです。(1) 旧約の予表のあらゆるいけにえの実際としてのキリスト。例えば、全焼のささげ物、穀物のささげ物、平安のささげ物、罪のためのささげ物、違犯のためのささげ物など(レビ第1章—第5章)。(2) わたしたちの福音の宣べ伝えによって救われ、キリストの肢体としてささげられた罪人(ローマ 15:16)。(3) わたしたちの体、わたしたちの賛美、わたしたちが神のために行なう事柄 (ローマ 12:1, ヘブル 13:15-16, ピリピ 4:18)。
- B. 特に、霊のいけにえは、全焼のささげ物の実際としてのキリストを含みます。わたしたちがどれほどキリストを、わたしたちの全焼のささげ物として神へとささげることができるかは、わたしたちがキリストの経験の中で、どれほどキリストを全焼のささげ物として経験したかにかかっています——レビ 1:6, 9, 6:8-13。
- C. 神は、いけにえとなっていない働きを受け入れません。すなわち、完全にささげ物となっていない働きを受け入れません。ですから、問題は「わたしは神のために何を行なったのでしょうか？」ではなく、「わたしが行なったことは神へのささげ物として行なわれたのでしょうか？」です。
- D. わたしたちは、聖なる祭司の体系の中の祭司として、恵みとして変わる事のないキリストを通して、「絶えず賛美のいけにえ……を、神にささげ」るべきです——ヘブル 13:15 :
1. 召会の中で、わたしたちはキリストを通して、賛美のいけにえを神にささげるべきです。
  2. 召会の中で、キリストはわたしたちの中で、賛美の歌を父なる神へと歌います。わたしたちもキリストを通して、父なる神を賛美すべきで

## 5. 祭司の体系の二つの位

す—2:12 :

- a. キリストとわたしたち、またわたしたちと彼は、ミングリングされた霊の中で共に、御父を賛美します— I コリント 6:17。
- b. キリストは命を与える霊として、わたしたちの霊の中で、御父を賛美します。そしてわたしたちは、わたしたちの霊によって、キリストの霊の中で、御父を賛美します。
- c. これは、わたしたちがキリストを通して、神にささげることができる最上で最高のいけにえです—ヘブル 13:15。

### IV. 王なる祭司の体系は、わたしたちを暗やみから、驚くべき光の中へ召してくださった神の美德を告げ知らせます— I ペテロ 2:9 :

- A. 美德 (II ペテロ 1:3) は神聖な命のエネルギーと力であり、わたしたちが目標としての神の栄光に到達するようにさせます。美德 (I ペテロ 2:9) は神の卓越性であり、神であるものと、神が所有しているものを指しています。
- B. 告げ知らせるとは、広く宣べ伝えることです。これは、わたしたちを暗やみから驚くべき光の中へ召してくださった方の美德を、福音として広く宣べ伝えることによって、人に益を得させることです—9 節 :
  1. 暗やみは死の中にあるサタンの表現と領域であり、光は命の中にある神の表現と領域です— I ヨハネ 1:5。
  2. 神はわたしたちを召し、救い出して、サタンの暗やみの死の領域から、神の光の命の領域へと入れてくださいました—使徒 26:18. コロサイ 1:13。

務めからの抜粋 :

### アロンとメルキゼデク

ヘブル人への手紙第 5 章 1 節から 6 節と第 7 章 1 節から 3 節の御言は、祭司の体系の二つの位を啓示しています。第一の位はアロンによるものであり、第二の位はメルキゼデクによるものです。アロンによる祭司の位は人のものであり、人の必要を神にもたらしめます。なぜなら、これらの祭司たちは人々の間から選ばれたからです。しかし、メルキゼデクによる位は神から人へ来るものであり、神のものを人に分け与えます。

祭司の体系のこれら二つの位には、二つの方向、あるいは「双方の往来」があります。第一の位においては、その方向は人から神であり、第二の位

## 5. 祭司の体系の二つの位

においては神から人です。わたしたちの大祭司であるキリストでさえ、これらの二つの方向を伴った二つの位を持っています。彼はアロンの位による大祭司であり、またメルキゼデクの位による大祭司です。アロンの位によれば、彼は人として、人々の間から選ばれ、人のすべての必要を携えて神に行きます。しかし、メルキゼデクの位によれば、神の御子として、彼は神から来て、神をわたしたちに分け与え、神のものをもってわたしたちを祝福します。

今、出エジプト記第 28 章 12 節と 29 節を読みましょう、「その二つの石をエポデの肩当てに付けて、イスラエルの子たちの記念の石としなければならない。アロンはエホバの御前で彼らの名を両肩に担い、記念としなければならない。……こうしてアロンは聖なる所に入っていくとき、裁きの胸当てにあるイスラエルの子たちの名を胸に抱いて、エホバの御前で絶えず記念としなければならない」。アロンは大祭司として、神の民のすべての名を担って神の臨在の中に入り、ある種の記念としました。

創世記第 14 章 18 節から 20 節は言います、「サレムの王メルキゼデクは、パンとぶどう酒を携えて来た。彼はいと高き神の祭司であった。彼はアブラムを祝福して言った、『祝福があれ、アブラムよ、いと高き神、天と地の所有者より。あなたの敵をあなたの手に渡されたいと高き神は、ほむべきかな』。アブラムは、すべての物の十分の一を彼に与えた」。メルキゼデクはパンとぶどう酒を携えて神から来て、神のために戦いを戦ったアブラムに出会いました。彼はパンとぶどう酒をもってアブラムを祝福しました。これはとても興味深いことです。彼はただこれら二つのものをもって、すなわち、わたしたちが主の食卓のために用いるのとまさに同じものをもってアブラムを祝福しました。

ペテロの第一の手紙第 2 章でも、祭司の体系のこれら二つの位を見いだすことができます。わたしたちは 5 節でアロンの位を、9 節ではメルキゼデクの位を見ます。「あなたがた自身も生ける石として、霊の家に建造されていながら、聖なる祭司の体系となって、イエス・キリストを通して、神に受け入れられる霊のいけにえをささげなさい」(5 節)。これはアロンの位による祭司職であり、人から神に何かを持って行くのです。

「あなたがたは選ばれた種族、王なる祭司の体系、聖なる国民、所有として獲得された民です。それは、あなたがたを暗やみから、驚くべき光の中へ召してくださった方の美徳を、あなたがたが告げ知らせるためです」(9 節)。5 節の聖なる祭司の体系は人から神に何かを持って行き、9 節の王

## 5. 祭司の体系の二つの位

なる祭司の体系は神から何かをもたらし、人に宣言し、告げ知らせるのです。

### 人の性質は聖でなければならない

祭司の体系は、人の性質と神聖な性質の両方から成っています。それは基本的には、肉体と成ることによるものであり、神聖な性質が人の性質とミングリングされているものです。祭司は神と完全にミングリングされた人でなければなりません。人の性質は、神聖な性質とミングリングされるために、聖でなければなりません。もともと、それは俗的でこの世的でした。しかし、それは祭司の体系のために神聖な性質とミングリングされなければならないのですから、聖でなければなりません。ギリシャ語の「聖」という言葉は、(神へと)分離されることを意味します。祭司の体系の中にいるために、わたしたちはこの世から、またすべての俗的な事物から分離されなければなりません。そうでなければ、わたしたちは決して祭司となることはできません。

祭司とは主に仕える人です。もしわたしたちが祭司でなければ、彼に仕えることは決してできません。わたしたちは神学校、聖書学院、あるいは聖書学校に行った後、主に仕える準備ができていると決して思ってはいけません。それはわたしたちを「職業的な」祭司とするだけであって、真の祭司とはしません。真の祭司となるためには、わたしたちは聖でなければなりません。すなわち、わたしたちはこの世のすべての事物から、またすべての俗的な事物から分離されなければなりません。

まず、わたしたちの言葉が分離されなければなりません。わたしたちはこの世の人々のように話すべきではありません。わたしたちの会話はすべての俗的な事物から分離されなければなりません。わたしたちの思想、観念、考えでさえ分離されなければなりません。わたしたちの考えることはあまり俗的であってはなりません。それは分離されていなければなりません。わたしたちが俗的でこの世的なあらゆるものから分離されていなければ、わたしたちは祭司職において破綻はたんしている者です。わたしたちの話し方、考え方、行なう方法だけでなく、金銭の使い方でも聖でなければなりません。多くの兄弟姉妹は、祭司となって主に仕えたいと言いますが、彼らの金銭を使う方法によれば、彼らは祭司職から外れているのです。祭司は金銭を使う方法において分離されていなければなりません。

わたしは兄弟あるいは姉妹の家を訪問した多くの時、彼らの家がとても

## 5. 祭司の体系の二つの位

俗的で、とてもこの世的であったので、悲しみました。それは分離されていませんでした。前世紀に、A・J・ゴードンとS・D・ゴードンという二人のゴードンがいました。わたしはどちらのゴードンであったか覚えていませんが、彼らのうちの一人が、主に仕える若者のころ、新しい家を買いました。彼はそこに引っ越して、すべてのものを完全に備え付けました。そして彼は父親に、来て新しい家を見てほしいと頼みました。父親がその家を見た後、若いゴードンは父親に、どう思うかを尋ねました。父親は、すべてはとてもすばらしいが、一つ質問があると言いました。それは、もし知らない人がこの新しい家に入って来たなら、その人はこれが悪魔の子の家なのか、それとも神の子の家なのかを告げることができるかどうかというものでした。ゴードンの父親が意味していたのは、この家が分離されていないということにほかなりませんでした。それはあまりにも俗的でこの世的でした。それは非常に多くのこの世の人々の家とまるで同じようでした。分離も聖もありませんでした。

ときには、さまざまな兄弟姉妹の服装が、「これらの人たちはクリスチャンなののでしょうか、それともこの世の人たちなののでしょうか？」という疑問を他の人たちに持たせます。この時代の流行からの分離がなければなりません。そうでなければ、わたしたちは決して祭司職を持つことができません。祭司職には聖なる分離がなければなりません。

祭司職にある人たちとして、わたしたちは自分たちの必要と他の人たちの必要をすべて携えて、絶えず主に行かなければなりません。ヘブル人への手紙第5章によれば、大祭司自身にさえ必要がありました。彼は同じ弱さを身にまとっているのです。他の人たちに同情することができます。わたしたちはみな人であるので、人のすべての必要と弱さに同情することができます。祭司職にある者たちとして、わたしたちはこれらすべての必要を携えて絶えず主に行かなければなりません。

しかしながら、主の臨在の中で彼と接触することは、わたしたちが分離されていることを必要とします。俗的な事柄は何であれ、わたしたちと主との交わりを妨げます。それはおおいのようなものとなり、わたしたちを覆い、主の臨在からわたしたちを分離します。わたしたちが人のすべての必要を携えて主の臨在の中にとどまることができる前に、わたしたちは分離されていなければなりません。わたしたちを覆い、わたしたちを主の臨在から分離する俗的なものが何かあるなら、わたしたちはおおいをかけられています。わたしは、「隔てはありません。主よ、隔てはありません」

## 5. 祭司の体系の二つの位

という詩歌が好きです。わたしたちが主と接触しようとするなら、隔てがあってはなりません。わたしたちと主との間にあるいかなるものも、裂かれなければならないおおいです。わたしたちはその特定のものから分離されなければならないではありません。わたしたちは、主がとても大きいと考えますが、ときには彼は非常に小さいのです。ときどき、主はただの一足の靴について人と争われます。わたしたちはそれを好むかもしれませんが、主は好まないのです。

わたしは若かったころ、とても多くの小さな事柄において主によって対処されました。わたしは霊的書物を買ひ、それを返さなければならなくなったことさえありました。主は内側で、ある別の目的のためにお金を必要としているので、わたしはこの本を買うべきではないと告げておられたのですが、わたしは構わずそれを買ってしまったのです。家に帰ってから、わたしは食べることも眠ることもあまりできませんでした。わたしは言いました、「主よ、あなたはそんなに小さくありません。あなたはとても大きいのです。どうしてあなたはそのような小さな事柄を気にかけるのでしょうか?」。そこには真の苦闘がありました。わたしは祈ることも、務めをすることさえもできませんでした。最終的にわたしはその本を返すことを余儀なくされました。わたしたちの多くがこのような経験をしたことがあると、わたしは信じます。主と接触するために、わたしたちは分離されなければならないではありません。わたしたちは主に求めて、わたしたちが何から分離されなければならないかを示していただかなければなりません。わたしたちは内側で知るでしょう。事実、わたしたちはすでに知っているのです。

このように、祭司職の第一の面は、人のすべての必要を携えて主に行くことです。アロンの祭司職として、わたしたちは人とその人の必要をわたしたちの肩と胸に担わなければならないではありません。これは、わたしたちが力と愛をもって彼らを担わなければならないことを意味します。大祭司が主の臨在の中に入って行ったときはいつでも、彼は両肩に十二部族の名が彫られた石のある祭司の衣服を着ていました。十二部族の名を帯びた十二の宝石は胸当てに付けられました。これは、大祭司が神の民を担って神の臨在の中に入ることを表徴しています。わたしたちは時間を費やして、わたしたち自身の必要、兄弟たちの必要、全召会の必要をすべて主の臨在の中にもたらし、そこにしばらくの間とどまっていなければならないではありません。これが聖なる祭司の体系です。

## 王であることは聖から生じる

人の性質は、王なる神聖な性質とミングリングされるために聖でなければなりません。わたしたちが神聖な性質を持つ限り、わたしたちは王職を持ちます。というのは、神聖なものは何であれ、王であるからです。わたしたちが聖であるなら、王であることは容易です。わたしたちが何の保留もなく、進んで完全に神へと分離されようとするなら、わたしたちは王になるでしょう。わたしたちは神へと分離されればされるほど、ますます聖となり、王になります。

聖なる、分離された祭司として主の臨在の中にとどまった後、わたしたちは主の臨在から神聖なものを持って出て来ます。わたしたちは人のものを持って主に行きましたが、主の臨在から神聖なものを持って出て来ます。わたしたちは王なる祭司として出て来ます。わたしたちが王になるためには、聖でなければなりません。主の臨在の中にとどまった後にわたしたちが他の人たちの所に来るとき、彼らはわたしたちの中に神聖で王であるものを感じます。これが王なる祭司職です。わたしたちは今やキリストのものを持っており、彼らに分け与えます。キリストはパンとぶどう酒で予表されています。それは、わたしたちのために死に、ご自身の体と血をわたしたちの享受のために与えてくださった方を示しています。パンとぶどう酒は、ご自身をわたしたちに与えてくださった贖うキリストを予表しています。

未信者に接触する前に、わたしたちは王なる祭司となるために聖なる祭司でなければなりません。わたしたちはまず、未信者の友人たちの名前をすべて持って主の臨在の中へと入り、彼らの必要に関するすべてを主に告げなければなりません。こうしている時、わたしたちは主の臨在の中で聖なる祭司として務めをしているのです。しかし、わたしたちがそのような必要を持って主に行く多くのとき、主はまずわたしたちの中の対処されなければならないものを指摘されます。もしわたしたちが主の要求に進んで応じなければ、わたしたちは終わりであり、祭司職から解雇されます。しかし、進んで対処されるなら、わたしたちは未信者の友人たちのために聖なる祭司として主の臨在の中にとどまることができます。しばらくの間、主の臨在の中に何度もとどまった後、主はわたしたちを導いて、彼の臨在から友人の所に出て行かせます。そのとき、わたしたちは神聖な性質と神聖な王職を伴って出かけます。わたしたちはただ人として行くだけではな

## 5. 祭司の体系の二つの位

く、神聖な存在として行くのです。わたしたちは王なる祭司として彼らの所に行き、神のものを彼らの中に分け与えます。彼らの中にそのように分け与えるものは、贖うキリストです。これは、わたしたちが未信者の友人たちにパンとぶどう酒をもたらすことを意味します。わたしたちが彼らに供給するものは何であれ、パンとぶどう酒のものです。そして最終的には、わたしたちの友人の何人かが救われるでしょう。

ペンテコステの前の十日間、ペテロと百二十人の者たちは上の部屋でひたすら祈っていました。その時、彼らは聖なる祭司の体系でした。彼らは十日間、完全に、絶対的に主へと分離されていました。彼らは人の必要をすべて主の臨在の中にもたらしめました。十日後、ペンテコステの日に、彼らは主の臨在から出て来て、主イエスが何を行なわれたかを人々に言明しました。その時、彼らは王なる祭司でした。人々でさえ、彼らを漁師ではなく王と見なしました。ペテロがそこで立って語っていた時、人々は何か重みのあるもの、神聖なもの、天的で王であるものを感じました。彼は王なる祭司であり、パンとぶどう酒としてのキリストを必要のある人たちに分け与えていました。

メルキゼデクが来てアブラハムに出会った時、彼は神の臨在から出て来て、パンとぶどう酒としての神のものを供給してアブラハムを力づけました。アブラハムは長い間、戦いを戦い、とても疲れており、困窮していました。彼はパンとぶどう酒で支えられる必要がありました。ですから、メルキゼデクは神から、また神と共に来て、パンとぶどう酒を彼に供給しました。これが、王なる祭司職です。

祭司としてわたしたちが認識しなければならないことは、わたしたちが自分たちの必要や他の人たちの必要を持って主の臨在の中に入るときはいつでも、わたしたちは聖なる祭司であるということです。こういうわけで、わたしたちは非常に多くの俗的な事物から分離されなければならないのです。わたしたちが主に対して正しくなり、彼の栄光で浸透されるとき、わたしたちは王なる、尊貴な祭司として、神の臨在から人々の所に出て行くでしょう。そしてわたしたちは、パンとぶどう酒で予表される、贖う方であるキリストご自身を彼らに供給します。わたしたちはこの世から分離され、また彼の臨在で浸透されます。これが聖なる、また王なる祭司の体系です。

## 聖なる、また王なる祭司の体系だけが 召会を建造することができる

召会生活において、わたしたちは個人的な生活では聖なる祭司でなければならず、集会の中では王なる祭司でなければなりません。日々、わたしたちは主の臨在の中において、自分たちの必要や、すべての兄弟たち、また未信者たちの必要を彼にもたらさなければなりません。毎日、わたしたちは聖なる祭司として主の臨在の中で時間を費やさなければなりません。そうすれば、わたしたちは集会に来るとき、困窮している人たちにキリストのものを分け与えます。このようにして、わたしたちは召会の中で、聖なる、また王なる祭司として機能するのです。

聖なる、また王なる祭司の体系こそ、主が今日必要としておられるものです。しかし、今日のキリスト教を見てください。ほとんどすべての信者が、聖なる祭司として神へと分離されようとしません。そして彼らが「召会に行く」とき、王なる祭司として分け与えるべきキリストのものが何もありません。彼らはただ預言者を仰ぐだけです。だれもが信者席に静かに座っています。彼らは祭司ではなく、平信徒であり、座って「良い」メッセージを待っているのです。これが今日のキリスト教におけるあわれむべき状況です。

祭司職が回復されるまで、召会の正しい建造は決してありません。わたしたちはみな一人一人、個人的な生活において聖なる祭司となる学課を学ばなければなりません。わたしたちは自分自身と他の人たちを主の臨在にもたらすために、すべてのことにおいて完全に主へと分離されなければなりません。そうすれば、わたしたちは集会に来るとき、自然に王なる祭司となって、疲れ困窮している多くの人たちに、パンとぶどう酒としてのキリストをもたらしめます。これが召会の建造をもたらすのです。そうすれば、預言者は「失業」し、彼らには行なうべきことが何もありません。これが、召会が建造されるための唯一の道です。

主イエスをご自身の召会を建造されるのは、預言者としてではなく、祭司また王としてです。ゼカリヤ書第6章は、若枝であるキリストが預言者としてではなく、祭司また王として宮を建造することをはっきりと告げています。幕屋、ソロモンの宮、回復された宮は、祭司職と王職によって建造されました。

召会の建造も、原則は今日、同じです。わたしたちは失望していると

## 5. 祭司の体系の二つの位

き、ちょうど預言者ハガイが来て、大祭司ヨシュアと総督ゼルバベルを励ましたように、預言者が来てわたしたちを励ますことを必要とするかもしれません。しかし、召会を直接建造することは預言者に依存していません。むしろ、それは祭司職と王職に依存しています。わたしたちは祭司また王であることを、すなわち、聖なる祭司の体系、また王なる祭司の体系であることを学ばなければなりません。わたしたちはすべての地方において、兄弟姉妹が聖なる祭司として主の臨在の中で機能し、また王なる祭司として人々に対して機能するのを見るまで、負担を与えられて主に叫ばなければなりません。

召会の建造は、いかなる種類の教えによって起こるのでもありません。それは生ける祭司の体系の二つの位によって起こります。わたしたちは特に、わたしたちの町で、またすべての場所で、一群れの信者たちが起こされて、アロンの位による、またメルキゼデクの位による生ける祭司として機能するように主に祈らなければなりません。(ウイットネス・リー全集、1966年、第1巻(下)、祭司の体系、第5編)